

教会の一年は、降臨節に始まりまして降臨節前主日で終わりますので、今年  
は次主日で教会の一年が終わることになります。世間の暦より約一カ月早く教  
会は新年を迎えます。聖餐式の際に私達が学びます聖書の箇所も、やはりしめ  
くくりの意味を含めた箇所が選ばれております。

本日の福音書、マルコによる福音書13章14節以下は、終末と言われるこの世  
の終わりに際してのことが書かれておりました。終末と言いますとどこかわか  
りにくく、聖書の箇所を読んでみますと審きやおそろしい情景が記されており、  
どのように受け止めたらよいのかわからない、恐怖感だけが募っていくという  
方が多いようです。聖書は終末に関してどのようなメッセージを私達に伝えて  
いるのでしょうか？

本日の箇所を含めまして聖書の語る終末の様子は恐ろしい情景です。太陽が  
暗くなるとか、星が光を失うとか、今までに見たこともない天変地異が起こる  
とかそのような記事が多く見られます。しかし終末とこのような情景は必ずし  
も直接結びつくものではありません。聖書に書かれている終末の情景は、当時  
のユダヤの人々が理解していた終末のイメージなのです。ユダヤの人達は自分  
たちの創造力を働かせて、この世の終わりに起こる出来事をこのように考えて  
いたということなのです。従ってこの情景はユダヤの影響を強く受けており、  
その伝統や考え方の上に成り立っているものなのです。ということでこれは一  
つのイメージとして考えるべきであり、こうしたことが必ず起こるということ  
ではないわけです。

それでは私達は終末をどのように受け止めればよいのでしょうか。それは一  
口で言いますならば人間が人間として正しくあると言うことでもあります。私達  
人間は未来のことは何もわかりません。自分の命はいつまで続くのか、いつ終  
わるのか、明日どんな出来事が起こるのか、誰もわかっている人はいません。  
もしかしたら明日自分の命は終わるかも知れないのです。私達人間は皆、そう  
いう存在であります。しかし私達は明日も知れぬ存在であることを忘れてしま  
いがちです。その結果、傲慢になったり、自分をどんどん高いものにしようと  
したり、今がよければそれでよいという考えに陥ってしまったりしてしまい、  
自己中心な、自分が何でも切り開くことができるかのような錯覚に陥ってしま  
うことがあるのではないのでしょうか。主はこうした私達に対し、日々の生活に

問いかけをしておられるのです。あなたたちの生活はそれでいいのか、自分自身の姿はそれでいいのか、神様の前に正しく生きていこうとしているのか、終末とは人間が自分自身を正しく捉えるところから始まるようであります。すなわち私達の信仰生活は毎日の決断の連続であるということです。主は私達人間が正しく決断し、正しく毎日を歩んでいくことを望んでおられるのです。私達が、明日があるから、今日はともかくこれでよい、今日よければあすはいつでもよい…、そのように考えるとしたら、それは自分自身の姿を正しく見つめていないことになります。塵からつくられた人間は塵に戻るのだということをよく理解しなければなりません。しかし主は、そのような人間を深く愛され、天国の座を約束され、招いてくださるのです。滅びしかない人間に対し、永遠の命を与えようとしておられるのです。わたしたちはそれを信じて、日々神様の造られた姿に忠実に生きなければなりません。それが終末を正しく捉える一歩であり、主が一切のことをまえもって言うておくと言われた真の意味なのです。私達は終末の恐ろしいイメージを捨てて、神様の前に正しい姿であり続けることを、終末の教えに触れる度に考えて取り組みたいものであります。